

同じ場所で 一ある住職の勇気

1948年（昭和23）の秋のことであった。この地区では秋の取入れが終わるとムラのお寺にお参りし、その後酒を飲み交わすことが恒例行事になっていた。その会場は庫裏であったが、被差別部落の人だけは本堂の板の間であった。それは昭和・大正・明治時代以前から行われており、別々の会場で行うことが慣習になっていた。

当時寺の檀家の中で被差別部落は10数軒であった。その食事会で被差別部落の人が使う食器は、飯椀と汁椀と小皿の椀の三枚であり、塗りは剥げ落ちていて、長く使われてきたことを物語っていた。

このように行われてきた食事の会を住職は、この年、突然合同で行った。戦後新しく始まった民主主義、誰もが平等だという憲法の考えに共感したからであろう。住職にとっては、目の前で行われる不平等な行為をこのままにしておけなかったのだろう。誰にも相談しなかったには、おそらく相談すれば周りから反対されるに決まっているからだろう。

案の定、宴席は蜂の巣を突付いたような騒ぎになった。被差別部落でない人たちが、「けがれる、けがれる。一緒になんかできるか」と騒ぎ、百人近く集まっていた人々は三々五々帰ってしまった。

さっそく、この出来事は村中の評判となった。寺はこの出来事によって孤立した。「寺に行けばけがれる」と噂が立った。次の日から毎日村人が「なぜ、一緒にやうたのだ。寺のお参りはもう出席しない」と寺に押しかけた。寺のわきを用水が流れていたが、その用水の下流にある家々からは「川の水がけがれていて使えない。田に水をかけられない」との声があがった。

中には野次馬のように、「被差別部落の人用のお椀を見せてくれ」と言ってくる人たちもいた。住職は怒ってお椀を燃してしまった。寺は周りから相手にされなくなった。翌年、被差別部落の人たちとごく僅かな被差別部落でない人が参加した。その後次第に理解されるようになり、参加する人たちも増えてきた。

この寺の住職が私の父である。人間は平等であり、同じ場所で行うべきだと敢然と実行に移した父。けがれという誤った意識に立ち向かった父。この父の行為が私の同和教育の原点となった。